

紙面から

教育随想

「工学教育は小学校・中学校から」
名古屋大学大学院工学研究科
教授 大久保 仁氏

羅針盤

「子供の発想と技能」
家庭科指導員 三浦みどり

この人に聞く

「万年青一筋」
水野 輝男氏

特集

「平成十二年度学校教育の視点」

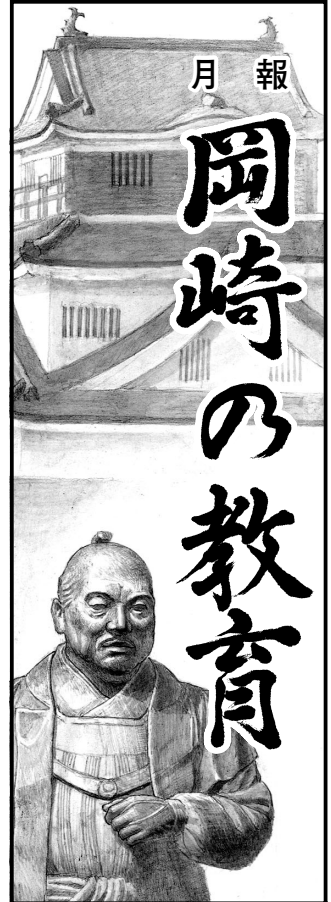
ふれあい

「来年も、もう一回」
小豆坂小学校 三浦 浩登

師弟同行

前南中学校長 岡安 信彦
福岡中学校 大山 英二

フォト・ヒストリー岡崎の教育
学区成人祝賀式(昭和五十二年)



4月号

平成12年4月1日

発行/編集
岡崎市教育委員会

今月の学校紹介
～常磐小学校～



社会に出て小学校・中学校時代の授業を思い出すことがある。最も印象に残っているのはどんな科目であろうか。もちろん人によって、あるいは興味の対象によって違ってくるであろう。私の場合は理科の時間をなつかしく思い出すことが多い。そこで時々考えることがある「理科は理学か工学か」と。



自動車や電車が動くのも、飛行機が飛ぶのも、コンピュータで遊ぶのも、そしてCDで音楽が聴けるのも、これは敢えていうなら「工学」である。工学は実社会学問である。身の回りの学問であり、かつ人類に役に立つものであり、したがって「使われてはじめて」その意味を成すのが

工学である。身近な社会が必要としているのが工学である。してみると、「実学」の真骨頂が工学ということになる。今一度、理科を工学という面から問い直してみたい。

私は「学問を教える」ということの半分以上は、「動機づけ」だと思っている。自身の知識なんてものは、「その気」になって勉強すれば先生

— 教育随想 —

工学教育は 小学校・中学校から

名古屋大学大学院
工学研究科教授

大久保 仁



を必ずしも必要としない。むしろ「その気」になる事が最も重要な事柄である。「その気にさせること」つまり「動機づけ」をする事に、教育は、つまり先生は最大限の注力をするべきであろう。特に、実学である工学を教える時には、動機づけの意味はことのほか大きいと思う。これ

こそ先生の役目であり、力の出しどころだろう。また、先生だけではなく、その分野の先端技術や将来技術、あるいは技術の変遷などの興味深い内容を、専門家や実社会の企業人などからわかりやすく直接授業を受ける機会があつて良い。近くの工場や、会社訪問をするのも良い、生徒達で興味あるところを議論して選ばせることも良い。参加型の授業が良い。

実習など、できれば手を動かせる授業がもっと良い。学問を使う実経験の機会を作りたい。理科を、工学を、実社会の中で使える学問にしたい。大学や国立研究機関へ直接出かける授業があつても良い。小さい卒業研究をやるのも良い、などなどいろいろ考えられる。

小学校・中学校で学ぶ「理科」は、理学と工学とを一緒に学ぶことができる数少ない機会である。だからこそ理科はおもしろい。理科の動機づけに工学を使うこともできる。理学教育だけではなく、社会が必要としている「実学＝工学」の意味をしっかりと考えてみたいし、小・中学の理科から初めて、高校・大学へと工学教育の連続性をつけていきたいものである。

(おおくほ ひとし)



子供の発想と技能

家庭科指導員

三浦 みどり

家庭科では、子供の発想を生かしたオリジナル料理・地域の方から学ぶ料理や生活に役立つ物の製作などが研究授業で取り上げられる場面が多い。

問題の解決や探究活動に主体的・創造的に取り組む態度を育成するために自由な発想を生かした作品をという単元構想には共感できる。

しかし、実際の授業展開を見ると、子供たちの技能が伴わず、未消化のままに作品が形作られていき、子供自身が明らかに不満を感じていることが伝わってくることもある。そんな時にこそ、教師の手立てが有効に働くもののだが、残念ながら、そのまま終わってしまう取り組みが少なくない。

そんな折り、「A先生の五年生「小物作りに挑戦しよう」の授業では、

ふるさとシリーズ この人に聞く



万年青一筋

水野 輝男 氏

水野さんの温室には、万年青おもとの鉢が所狭しと並べられている。

「最近では、『万年青』を読めない人がいて、万年筆屋かと言われることもありません。」

一見したところでは葉の大きさの違いくらいしか分からないが、よく見ると葉の伸び方、形、表情とそれぞれが違った姿を見せている。

「万年青を育てるときには、将来どんな姿になるかを思い描きながら育てます。子供を育てるときにその子の個性をみて、どんなふうに伸ばしていくのかを考えるのと同じです。みなさんが子供にしていることをわたしは万年青でやっているのです。」

子供は、自分の思いを言葉で表すが、植物は何も言わない。その分、育てる人が植物の様子に細心の配慮をしなくてはならない。

「万年青は、様子をよく観察し、小まめに世話をすると、万年も生き続けます。万年青は育てる人の足音で育つのです。」

徳川家康が三河から江戸入府の際に、万年の繁栄を祈念して万年青が贈られた。以来、新築、移転の祝いに万年青が贈られるようになった。

「緑を絶やさないと家は、家が絶えないといえます。緑を絶やさないといいことは、目配り、気配りができるといふことで、家庭が円満になり、事業にも精を出し成功するのです。万年青のように五年、十年と育っていくものを枯らしてしまふ人は、目配りや気配りを粗末にしている人ですね。」

百十余年にわたり万年青を育て続け、三代目の水野さん自身も十八才から万年青一筋である。戦争など何度出直しをしなくてはならなかったという。

「万年青は辛抱草といわれ、長い間、



毎日世話をしていくことが大切です。派手な姿ではありませんが、日本人の侘びとか寂といった感性に合っているのです。家康のような辛抱強い三河人氣質は万年青を育てるのに向いているし、岡崎の冬は寒く、夏は暑い気候も丈夫な万年青を育てるのに適しています。」

素人目にはなかなかその良さは分からない。しかし、お話をしてくださる姿から、実直さをそこはかとなく感じる。その実直さこそが、万年青の姿のようである。

氏名 水野 輝男 氏
生年月日 昭和三年十月二十一日
住所 羽根町前田三三二

こうした場面の教師の手立てのあり方を考えさせられた。

導入では、これまで、基礎技能を高めるために取り組んできた小作品の見直し、オリジナル作品製作へどのように生かすかを話し合わせた。教師試作の作品が並べられ、問題点を考えさせた。基礎的な技能を一通り学んでいる子供たちは、その話し合いを通して、二枚の布を縫い合わせて形あるものにしていく時に生きる「技能」の重要性を再認識した。そして、自分の作品にどう生かしていくかを考え、製作に入っていくた。

その際にも、一つ一つの技能についての疑問を解決できるようにいくつかの標本が置かれ、子供自身の解決力をサポートできる体制がとれていた。そのため、すぐに製作に没頭していく子供の姿が見られた。

体験してみても初めて分かる「物を作ること」の難しさ、面白さ、達成感を味わわせることができるのも、子供の発想を生かすための着実な技能指導があつてこそと再確認した。

〔推薦する専門書〕

『人間と家族を結ぶ—家庭科ワークブック』①② 国土社

『家庭科の実験・観察・実習指導集』

開隆堂



学校教育の視点

—平成12年度—

二千年のまさに節目の今年、平成十四年度からの新学習指導要領の移行期にあたる。とりわけ「総合的な学習の時間」の取り扱いについては、既に弾力的な運用による試行を経て本格的な実践段階である。

本市の各小中学校においては、新学習指導要領の主旨を踏まえ、これまで先進的な取り組みがなされ、高い評価を得ているところである。さらに、二十一世紀を見据えて、今、目の前にいる子供にとって必要なことは何か、学校と保護者や地域の人々との連携の中で考えていきたい。

一 学ぶ喜びを知り、自ら学び考える力を育てる。

今日の生涯学習社会において、人は生涯にわたり学び続ける意欲をもつことが大切である。その「学ぶ」ということの楽しさ、おもしろさの基礎を義務教育段階で身に付けさせたい。

その一つとして、世の中の諸事象や現象を始めとした学習事象について自分なりに気づき、考え、問題意識として高めることのできる力をつけることである。日ごろから、生活

の中のふとしたことから気づく感覚を磨くことを通して、強い問題意識となり、もっと知りたい、調べたいという意欲に至る。その学び方については、日常の学習指導の中で培うものである。子供に新鮮な驚きを与える教材の発掘、体験的な学習方法の導入など、実態に即した単元構想を期待したい。

日ごろから子供の興味・関心を始めとした実態をとらえ続ける教師でありたい。子供は何を求めているか、伸ばしてあげたい芽はどこにあるか、学ぶ側に立った学習指導を考えたい。

二 教科・領域の基礎・基本を押さえ、個性を生かす教育を充実する。

新しい教育の方法、方向を考えるとき、大切にしたいのは基礎・基本の土台に立つことである。基礎的・基本的な内容を押さえ、知識や技能の確実な定着を図りたい。内容を精選し、「できる」という自信もてるまでじっくり学習させたい。ときには繰り返し指導して「なるほど」と納得できるよう指導の徹底を図りたい。



学校教育に求められているものは、時代を超えて変わらない知・徳・体の調和のとれた児童生徒の育成である。各学校においては、児童生徒の関心や地域の実態等を踏まえた特色ある教育を展開することが大切である。それを具現するために、創意工夫を生かした教育課程を編成して、基礎・基本の充実に併せて豊かな人間性や自ら学び考える力の育成を図らなければならない。

「教育は人なり」
岡崎の教師は、教育者としての使命を自覚し、全校一致の指導体制のもと、敬愛の情で結ばれた師弟関係を確立し、学校と家庭や地域との連携を図りながら、社会の変化に主体的に対応できる能力を育成する岡崎の教育の創造に努める。

指導の重点

- 一 学ぶ喜びを知り、自ら学び考える力を育てる。
- 一 教科・領域の基礎・基本を押さえ、個性を生かす教育を充実する。
- 一 正義感・倫理観を備えた心豊かでたくましい児童生徒を育てる。

い。その上で個性を生かす教育の充実が望まれる。子供の興味・関心の方向性を探ることに合わせて、指導方法や指導体制を改善して個性を生かす指導の在り方について考えたい。

そのためには、学習内容に精通した教師を目指したい。何が基礎的な力か、何が基本的な力かよく見極めるには教材についてよく知ることである。教材研究の積み重ねによりポイントを押さえた指導ができるようになり、子供の興味・関心を引き出すことができる。日ごろの実践をまとめ、見直す営みが次への教育実践に反映する。

三 正義感・倫理観を備えた心豊かでたくましい児童生徒を育てる。

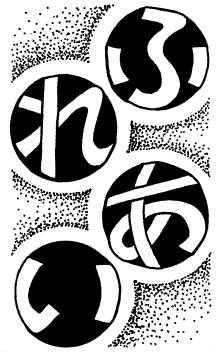
子供を取り巻く生活環境の変化は著しい。こうした背景を踏まえ、人として生きるために必要な基本的な資質や能力を身に付けさせたい。

そのためには、基本的な生活習慣の定着を図ることである。学校という集団生活の場において学ぶことは多い。人と人のかかわり合い方、集団の中で守らなければならない規

則など、学校においてお互いが気持ち良く円滑に生活するために必要な基礎的なことは、時に応じて学ばせたい。とりわけ物事の善悪の判断や自らを律する心構えなどは事ある度に教え諭したい。

また、教師の人となり、子供の人格形成に与える影響は大きい。教師もひとりの人間であるが、自らの在り方生き方を常に磨き上げるよう、自己研鑽に励みたい。教育者としての使命を自覚し、子供の成長を自らの喜びとして、ともに成長する教師でありたい。

以上、三つの指導の重点にそった教育活動を進めるにあたっては、教師は教育の専門家として強い使命感と責任感を持ち、粘り強い実践力を発揮したい。また、日々、健康な精神・身体あつての職務である。各学校においては、校長を中心にした学校の指導体制のもと、全教職員が一丸となって、子供の健全育成に励みたい。協力し合う教職員集団であつてこそ、父母や地域の人々の願いに応え、一人一人の子供にこれからの時代に「生きる力」をつけることができると思える。



来年も、もう一回

小豆坂小学校

三浦 浩登

「今年も、運動会で学級対抗リレーがあるんですか。」

四年生になったばかりのA男の母親の言葉である。A男は、走るのが極端に遅くクラスに迷惑をかけるので、できたら運動会を休みたいというのである。

「大丈夫ですよ、お母さん。走り方も指導するし、クラスみんなだって協力してくれるから。」

わたしは自信を持って言った。ところが、練習が始まると母親の心配が分かってきた。

A男には、競走という意識があまりないようだ。他の子が一周する間に半周がやっとである。

「A君、この白い線に沿ってずっと前を向いて走るんだよ。」

同じ班のB子たちが、A男の手を取って、トラックを走り出した。

運動会当日、A男は歯を食いしばって走った。歯を食いしばることも、B子たちがアドバイスしたことだった。でも、結果は最下位。

「Aちゃん、速くなったよなえ。」

「C君、転んだのにすぐ立てえらいよ。」

お互いの健闘をたたえ合う言葉の中に、A男のつぶやきが私の耳に確かに届いた。

「来年も、もう一回アンカーやりたいなあ。」



師弟同行

安心感のある存在

福岡中学校

大山 英二

わたしは黒板に向かうとき、

岡安先生の授業を思い浮かべ、字は一字一字しっかりと書くこと、線は一本一本でいねいに引くことを心がけています。

中学三年生の時に教えていただいた数字。先生の書かれる文字は、その風ほうに似合わず、（お許しください）常にちみつ、図形は実に正確でした。先生の分かり易い授業の基盤には、毎時間の板書の美しさがあつたように思います。

担任としての先生は、わたしたち一人一人の生徒をいつもそばから見つめておられました。球技大会で他のクラスに負けてしまった後に「大山



のシュートがリングにはじかれちゃったもんなあ」と、一緒に残念がられていたことをはつきりと覚えていました。

生徒に安心感を与えられる先生、岡安先生はまさにそんな先生でした。

「元気でやっとなるか」と、先生は折りに触れて、声をかけてくださいます。その言葉を励みとして、子供たちに安心を与える教師を目指して努力していきます。今後もご指導よろしくお願いいたします。

思いやりをもつて

前南中学校長

岡安 信彦

大山君との出会いは、わたしが矢作中から甲山中に転勤して二年目の年で、まだまだ

血気盛んな三十六才でした。君がいた三年三組はなかなかの豪傑ぞろいで大変おもしろい子が多い組でした。その中で大山君は、おとなしく大変まじめで勉強のできる、しっかりした生徒でした。

当時、甲山中では、毎年研究発表会があり、わたしも研究発表を数多くやりました。

その授業で君たちはわたしの意をくんで、よく発言し活躍してくれました。なぜか研究授業になると張り切る生徒が多かったことを思い出します。先生を助けてやろうという優しい子ばかりだったので。

わたしにとつても、君たちを担任したところが教員時代の最も充実した時でもありました。

大山君も、わたしが担任した時と同じ年齢になりました。君がわたしと同じ数学の先生になってくれたことが、何よりもうれしく思います。大山君のこれからの活躍を心から祈っています。頑張ってください。



◆期待の新任教員 四十八名

平成十二年度岡崎市小中学校新規採用教員は、四十八名(男子十七名、女子三十一名。昨年度より七名減少)

新任教員の氏名と配属は、次のとおりである。

・小学校(三十六名)

- 梅園小 黒川 麻紀
- 美合小 杉本 憲保
- 野沢 和代
- 渡邊 充佳
- 梶田 節男
- 青山 賢治
- 高橋 直子
- 佐久間裕子
- 鈴木 崇之
- 原田 康子
- 高梨 裕寿
- 渡辺修一郎
- 岩瀬 裕美

- 井田小 深津 智子
- 愛宕小 井戸 由実
- 常磐東小 刈内 真紀
- 常磐小 齋藤百合子
- 奥殿小 神谷 千春
- 細川小 山盛 誠治
- 岩津小 小橋 礼子
- 大門小 加藤久美子
- 矢作東小 加藤 良彦
- 伊藤 聡子
- 神谷有美子
- 戸井かおり
- 苺谷佳代子
- 吾妻 利彦
- 中川真由美
- 林 秀
- 上原 季佳
- 猪飼真希子
- 鈴木 基之
- 曾田 愛子
- 市川 典枝
- 青山 未紀
- 加藤 稔
- 大矢 邦博
- 奥村 学
- 杉浦 大作
- 中根 勅子
- 野尻 有紀
- 榊原 理恵

矢作北小

矢作南小

六美中小

六美北小

六美南小

城南小

上地小

小豆坂小

北野小

六美西小

甲山中

南中

- 富田 貴子
- 杉坂 和俊
- 濱田 明弘
- 諸原 都
- 豊永 晶子
- 榎本亜矢子
- 湯田 恭介
- 朝日新聞社賞
- 藤川小六年 平川 直広
- 城北中二年 深津菜美子
- 梅園小三年 今井 優希
- 藤川小三年 浅田 詩織
- 三島小三年 北野 大介
- 竜谷小三年 附柴 美紀
- 山中小三年 長坂 和洋
- 高橋 春菜
- 福対部長
- 調査部長
- 会計委員
- 女性部長
- 青年部長
- 会計監査
- 会計監査
- 石原 真吾

◆平成十一年度NHK全国短歌大会

・ジュニアの部 大会大賞

◆第二十七回人権を理解する作品コンクール

・書道の部 最優秀賞

◆第六回小中学生学校・学級新聞コンクール

・中学校の部 優秀賞

・教師の部 優秀賞

・中学校の部 優秀賞

・教師の部 優秀賞

・教師の部 優秀賞

◆市交通安全市民総決起大会イラスト入賞者

最優秀賞 小豆坂小三年 伊藤 真由

◆平成十二年度岡教組執行委員

- 委員 長 近藤 博之
- 副委員長 荻野 卓寛
- 書記 長 荻野 款司
- 書記次長 杉浦 明
- 組織部長 天野 孝志
- 情宣部長 山内 貴弘
- 教文部長 鈴木 誠
- 福対部長 小田 昌男
- 調査部長 鈴木 康子
- 会計委員 中西 勉
- 女性部長 鳥居 裕子
- 青年部長 大久保孝治
- 会計監査 伊藤 友隆
- 会計監査 石原 真吾



▲新任教員の集い
——岡崎市少年自然の家・3月27日

・題 字 岡崎市長 中根 鎮 夫
 ・タイトルバック 竜 海 中 金 澤 一 幸
 ・カット 小豆坂小 深津 勝 巳



学区成人祝賀式 (昭和52年)

昭和五十二年の正月に、常磐東小学校で開かれた、学区成人祝賀式の記念写真である。当時は安戸町に学校があり、ここで毎年、学区の成人を迎えた人たちを囲み、成人祝賀式を開くのが恒例の行事となっていたという。市で行われる成人式とは別に、学区でこういう会がもたれ、小学校が会場となっていたことから、学校が地域と密着していたことを感じさせる。

こうした行事も、校舎が米河内町に移転した昭和六十二年ころには行われなくなつたということである。



写真提供 常磐東小

春光の中を希望に胸を膨らませ、新一年生が元氣いっぱいに登校してくる。ピカピカのランドセルが、「頑張れよ」と励ましているかのようなのである。

新年度を迎えた。真新しいランドセルの中に、これからたくさんの思い出を詰めていってやりたいものである。

シ オ ス ア

末永く家系の繁栄を願って贈る万年青。こういう意味をもった植物であることを初めて知った。そういえば、昔からの贈り物には何かしらの深い意味があった。豊かな暮らしが可能な現在、贈り物を見た目には豪華になつたが、はたして本質は…。

桜花舞う校庭に響き合う子供たちの元氣な声。新芽の芽吹きにも似た若いエネルギーが躍動している。出会いは新鮮。見つめる瞳に込められた大きな「期待」。さあ、この期待にこたえられるだろうか。思わず身を固くする。

今、真剣勝負が始まった。

朝、教室に新しい花を飾る。新鮮な雰囲気にも包まれ、心にさわやかな空気が流れる。教室に花の絶えない学級は、花への目配り、気配りのみならず、学級への心くばりがあるのであろう。

はたして、今、教室にある花はいつまでもつのか。



- * 夫と妻 永 六輔 ￥660
岩波新書
- * 母の生き方 父の生き方 荒俣 宏 他 ￥1200
ポプラ社
- * 不登校の贈り物 前田 祥子 ￥1200
風媒社
- * 国境なき医師団は見た 鈴木 主税 訳 ￥1650
日本経済新聞社

* 実業家の文章 鈴木 治雄 ￥1600
ごま書房

決して文章の書き方の本ではない。渋沢栄一、武藤山治、石坂泰三ら12名の、きちんとした哲学、思想を持った実業家が登場。日本経済の基礎を築いた、巨人とも呼べる人たちはばかりである。事業を進める志、その人なりの生涯は実に魅力的である。

特にこれからは、学校に特色ある経営が要求される。私たち教師は、さまざまな分野の先人から、謙虚に学ぶ姿勢を持つことが大切であり、そのことが私たち自身を大きくしてくれよう。